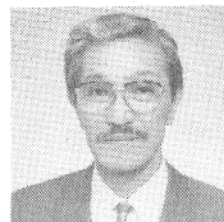


申 春 雑 感



巻 頭 言



三 村 務*

今年は壬申（みずのえさる）の年で、壬申の乱（672年）から数えて1320年目に当る。著者も1932年、壬申の生れで、この秋には還暦を迎えることもあって感慨無量の新春であった。

1945年（昭20）、旧制中学1年生の夏に終戦を迎え、以後中学3年生の時に新学制への切り換えで新制高校に移行し、初めての男女共学を体験した。新制大学から大学院へと新制度のテストケース第1号のクラスとして週5日制もサマータイムも経験し、米軍占領下での学生生活を送ったのであるが、この度の大学審議会答申に基づく大学教育、大学院重点化への道は新制大学発足以来の大転換期の到来を感じさせる。

昨年、創立40周年を迎えた薬学部がこの4月から新しく大学院独立専攻（環境生物薬学）が開設されることになり、学部2学科、大学院3専攻の形で大学院重点化への第一歩を踏み出したのは大きな喜びである。戦後、医学部薬学科としてスタートし、学部の独立を経て1962年（昭37）2学科が認可されて

以来、実に30年ぶりに2つの講座増設が実現したのである。長年の夢である大学院充実化へ順調に滑り出し得たのはひとえに関係者各位の深いご理解とご支援の賜であり、ここに厚くお礼を申し上げる次第である。

大学紛争の終結から二十数年を経て再び一貫教育が脚光を浴び、新しい教育体系への再編にむけて動き始めた機会に薬学教育を考えてみた。薬学部の場合、学部卒業生に与えられる薬剤師国家試験受験資格のための職能教育に加えて、それと連続発展して大学院において行われる高度の専門技術者・研究者の育成も重要な使命である。大学院重点化の必要性の理由の一つは医薬品に関する知識を高度に有する薬学研究者が薬剤師以上に社会・産業界から求められ、年々大きな比率を占めてきているからである。医薬品産業は知識集約型であるので天然資源に乏しい我国に相応しい産業であるが、他産業に比べると多くの研究開発費と高度の薬学専門教育を受けた人材が必要とされる。さらに近年、この分野への他産業からの参入が多く見受けられるので次世代を担う薬学研究者の需要はますます増大して行くものと考えられる。大学院教育の拡充が切に望まれるゆえんである。ここに関連諸産業界の深いご理解と温いご支援をお願いする次第である。

*Tutomu MIMURA

1932年11月8日生

1960年大阪大学大学院薬学研究科薬学部卒業
現在、大阪大学薬学部薬学部長、教授、薬学博士、

Biomedical Chemistry,
TEL 06-877-5111 (内線6201)